

ドングリに託された思い

〈兵庫県〉横山 里実 50歳

「私、胆のうにがんができたらしいの、家に帰れるかな……」初めてHさんと言葉を交わした時に、悲しげに話された。HさんはHごとに動けなくなり、ベッドに横たわっていることが多くなっていた。

秋晴れのある日、いつものように活気がなくベッドに横たわっているHさんに声を掛けてみた。

「今日はすごくいいお天気で外は気持ちがいいですよ、たまにはお日様にあたってみませんか？」

「えっ、いいの？ 散歩に行けるの？」

「大丈夫、私がお手伝いしますから行けますよ」と伝えると、Hさんは笑顔で車いすに乗り込んだ。笑顔は見せてくれるものの、熱や痛み

などの症状が無いわけではない。病院の玄関を出て日向ぼっこができる最も近い場所で車いすを止めた。

「ほら、お日様ひさまって気持ちいいですよね、たくさん元気をもらえる気がしますね」と声を掛けると、Hさんはお日様に手をかざした。

「あゝ気持ちがいい、ありがたい、ありがたい、一生の思い出……」と涙ぐみながら日差しを浴びていた。

「もう秋ですね、病院で自慢のドングリの木があるんですけど、ドングリ拾いしてみませんか？」と声を掛けると、Hさんは良い笑顔を見せてくれた。近くのドングリの木の下に案内し、ドングリを3つほど拾ってHさんの手のひらに乗せて部屋に戻った。ほんの10分程度の散歩だ

った。Hさんはその冬に亡くなられ、その記憶も薄らいだある日、息子さんが来られ「母が入院中に大切にしていたドングリを庭に植えたら、芽が出てきたんです。大切に育てるつもりです」と話してくれた。

ドングリってあの時の？ 私はその時の記憶がよみがえった。ポカポカお日様や心地よい風、手にすると笑顔になったドングリ、あの時Hさんが言葉にしたように本当にHさんには「一生の思い出」に結びつくものとなっていた。そして、家に帰りたいかっつたHさんの思いはドングリに託され、自宅の庭で息子さんに大切に育てられている。